

第40号 50円

昭和51年1月25日

内容

- 十年の成果を目のあたりにして… 1
- 開館十周年記念会……………2~3
- 明日に向けて一記念グラフ……………4~5
- 祝辞から……………6~7
- マスコミが十年の歴史を祝う……………7
- 千人会報告・寄付金報告……………8~9
- 第79回大学共同セミナー……………10
- 第80回大学共同セミナー……………11
- 館長日記から……………13
- 業務通信……………12 利用状況……………13~14



発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

〈所在地〉

東京都八王子市下柚木 (〒192-03)

電話 0426-76-8511~3 振替口座 東京 74590番

〈東京事務所〉

東京都中央区日本橋本町3-3 三井銀行本町支店ビル5階 電話 東京 (241) 3961

編集・発行人・飯田宗一郎

製作 中央公論事業出版

十年の成果を目のあたりにして

〓 十周年記念式のこと 〓



手塚 富雄

大学セミナー・ハウスにつねづね御無沙汰していることを心苦しく思っていたが、久しぶりで八王子まで出掛け、十周年記念式に列なることができた。発足以来十年といえ、もう十年にもなるのかと時間の速さを感じるのが普通のことだろうが、わたしはその逆に、こんなに成長したセミナー・ハウスの齢がまだ十歳にしかなくて、いまいちかという感じに打たれた。つまりセミナー・ハウスは実に充実した道を歩み、今では日本の大学教育において無視することのできない存在となり、その影響を陰に陽にひろげつつあるので、この十年間を内容的には十年以上の歳月に匹敵するものにしてきたのである。これは実に飯田さんを始めとして館の実務を担当している方々の努力の結果である。わたしはこの記念式で今更ながらそれへの感謝と敬服の思いを新たにしたのであった。

式は正田理事長の挨拶に始まって、簡素に、しかも実質をもって行なわれたのは、ありがたかった。実質をもって、というの



記念撮影——来賓、教授、学生がよろこぶ広場で

ありきたりの式次第ばかりでなく、大塚久雄、板垣與一両博士の講演とそれについての質疑応答を聴くことができたからである。これはいかにもセミナー・ハウスの行事らしい、気持ちのいいことであつた。世の中のこの種の行事が、

外的形式を踏むだけでなく、こういう行き方をどんどん採り入れたらいいだろうに、と思った。

式の進行につれて、わたしにとって意外なことが起つた。飯田館長が立って、この際感謝すべき人々に花束を贈ると言うので、結構なことだと思つていると、まずわたしの名が呼ばれた。初代の企画委員長だつたから、というのである。企画委員長だつたことに間違はないが、わたしがセミナー・ハウスのためにしたことといえは実に微々たるもので、感謝をいわれるようなものではない。それにわたしはこの式に出てこんな指名をされるであらうことは、あらかじめことも聞いてはいなかった。だしぬけのことには当惑しながら、わたしは飯田さんが予定したであろう式の流れをみだすこともいけまいと、とっさの間に考え、こういう際に要求されると思われる最小限度のビヘーヴィアをした。つまり立っておおじぎをしてその花束をある未知のお嬢さんの手からいただいた。とは言つても、いただいたのは紅と黄のバラで非常に美しかった。あと

わたしは飯田さんに個人的に顔を合わせて、「どうもあなたは人が悪い」とこの不意打ちの演出をこぼしたが、これはわたしとしては氏の好意への感謝の言い換えのつもりであつた。

式場で多くの方にお目にかかったが、中でも上代たの先生のお姿に接したのは喜ばしい限りであつた。あのお齢で、しかもこの遠方までお出かけになる熱意には頭がさがるほかはない。飯田さんは上代先生に対しても、予告なしの演出をしたようである。先生に何かを捧げ、それから握手をしようというのである。上代先生はその厚意は受けられたが、握手の方はやわからかに辞退された。飯田さんの独思実行型も人によっては通じないこともあるのだと思つた。

さきほど触れた、大塚、板垣両大家の東西文明についての講演は、現代文明についての問題提起で、実に有意義だつた。わかりやすく、そして皆がこの時代に対処する道を考える上で、視点とヒントを与えられたのである。また、聴衆の学生諸君の中から活潑な質問が出たのもうれしかった。これもセミナー・ハウスでの経験を経た人たちだからであらう。時間が切迫しないでもっと思想の交換があればいいと思つたのは、わたし一人ではなかつたらう。

(東京大学名誉教授、当法人評議員)

大学共同体を創った十年の歴史を祝う

開館十周年記念会

昭和50年11月1日

好天に恵まれた11月1日、晩秋の多摩の丘に歓喜の讃歌が流れた。開館十周年の暮あけとして3月7日、『大学を開く』の出版記念会が行われ、6月27日には大学院セミナー館の落成と遠来荘の移築完成を祝ったが、ここに至って十周年記念の一連の行事はいよいよクライマックスを迎えたわけである。当日は来賓というよりはむしろ身内の者として、約三五〇名の方々が十年の歳月に万感をこめてご出席下さった。昭和40年7月の開館以来、当ハウスを利用された先生や学生は延べ三七万人を数え、法人のカー

■記念式典

東京学芸大学講師・宮田清氏のピアノによるポロネーズの調べによって開会。

司会の聖心女子大学教授・岡宏子氏は開会を宣しながら、比較的新参者の私が司会者に指名されたのも、「明日に向かって」というテーマで十周年記念が行われることから意図された深遠な考えであらうか、と述べられた。

最初に正田建次郎理事長が開会の挨拶に立ち、十年間に当ハウスが日本の大学教育に果たしてきた役割が今日高く評価されている喜びと今までの各方面からのご支援を感謝し、今後も意義のある仕事が発展して行くために一層のご協力をお願いしたい旨を述べられた。続いて飯田館長は、初代の企画

下に登録された先生方、後援者は三、七〇〇名、国公私立大学の協力会員校は四七校となった。まさしく十年の年輪を加えたわけである。一方、開館当時はわずかばかりの民家が点在する丘陵地帯であった周辺の多摩の自然は、この十年の間に宅地開発によって変貌した。しかし、ここを利用されたゼミの方々が植えられた多くの記念樹がみごとに育って、美しいキャンパスを作っている。

寄贈者の思い出多き青葉かな 岡本 定次

委員会委員長・手塚富雄氏が今日ここに出席下さっているの、この記念会のプログラムの中で特別にお礼を申し上げたい旨を述べ、女子学生から手塚先生に感謝の花束が贈呈された。創立当初においては、設立の目的、ハウスの理念を社会にPRする必要がある。まづ学長のサークルに、そして財界人に。しかし最も大切な方たちは、施設が完成した段階で実際にそれを使用されるであろう一般の教授たちなので、ある時は大體で、ある時は箱根で、「大学教育セミナー」が行われたわけであるが、その企画にご尽力下さったのが手塚先生であった。

引き続き館長は、この秋、大塚久雄先生が文化功労者になられたというビッグ・ニュースに接した喜びを語り、女子学生からお祝いの花束が先生に贈呈された。先生と当ハウスとの関係も開館前さかのぼるわけで、昭和39年5月の安田講堂におけるセミナー・ハウス主催の講演会、40年11月の落成記念セミナー、45年の五周年記念セミナー、そして今回の十周年記念シンポジウムと、再三にわたる記念の行事にご登場願ったわけである。

次に、勤続十年の職員の表彰が行われ、サービス・センター主任・荒川孝子、食堂マネージャー・酢屋善元、同コック長・高橋敏雄、同接客係・新江とみ子の四氏に理事長から記念品が贈られた。表彰式にはつきものの感謝状にかわって、記念写真を差し上げたいという館長の発案があり、参会者の見守る前で表彰者四氏に理事長、館長が加わって記念撮影が行われ、出席者全員からねぎらいの拍手が四氏に贈られた。

■プログラム

昭和50年11月1日(土)

受付開始(13時30分)

記念写真……………ようこそ広場 (13時45分)

お茶席……………遠来荘

展示「十年の歩み」……………図書館

◆記念会(14~15時)……………講堂

△司会▽

聖心女子大学教授 岡 宏子

△奏楽▽

東京学芸大学講師 宮田 清

○ベートーヴェン作曲||ポロネーズ

△挨拶▽ 理事長 正田建次郎

△感謝と表彰▽ 同

△開館十周年記念論集『東洋文化と日本』贈呈▽

編著者 三枝充憲・今井淳

△独唱▽東京学芸大学講師 栗飯原美智子

○シニューベルト作曲||アヴェ・マリア

○フッチーニ作曲||歌に生き愛に生き(歌劇「トスカ」より)

△祝辞・メッセージ▽

東京大学名誉教授 手塚 富雄

文化庁長官 安嶋 弥

法政大学総長 中村 哲

上智大学学長 ヨゼフ・ピタウ

東京都立大学教授 唄 孝一

国際基督教大学教授 都留 春夫

明治学院大学教授 神保 信一

東京大学助教授 木村尚三郎

評論家 筑波 常治

東京農工大学教授 川名 明

東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄

東京工業大学助教授 長松 昭男

国際教育交換協議会極東代表 E・ラングストン

《大学セミナー・ハウス讃歌合唱》

東京学芸大学学生有志

△挨拶▽ 館長 飯田宗一郎

△奏楽▽ (ピアノ) 宮田 清

○ムソルグススキー作曲||プロムナード、リモージュの市場、キエフの大門(「展覧会の絵」より)

◆記念シンポジウム (15~17時30分)

△司会▽

立教大学教授 小林 昇

「明日の世界を考える」

東京大学名誉教授 大塚 久雄

一橋大学名誉教授 板垣 與一

◆お祝いパーティ・学際サロン ……大学院セミナー館

△乾杯▽ 顧問 山内 恭彦

◆10年10発花火10分 ……ようこそ広場 (19時20分~30分)

◆学生交歓レクリエーション・ナイト……………ようこそ広場

ボン・ファイア

ガーデン・パーティ

◆オープン・ハウス 11月2日(日)

食堂主催ティー・パーティ

遠来荘茶席

続いて、開館十周年を祝って編さんされた記念論集『東洋文化と日本』が編著者のお一人である筑波大学教授・三枝充恵氏より理事長に贈呈された。この論集は昨年11月の第73回大学共同セミナー「東洋と日本」を指導された先生方によってまとめられたものである。

ここで少し固い雰囲気をはぐすべく、東京学芸大学講師・粟飯原美智子氏の独唱が入り、美しいソプラノが会場に快く響きわたった。次にご出席の方々からお祝いのメッセージをいただいた。題して一分間スピーチ。岡先生の巧みな誘導で創立当時から関係者として、あるいは会員校の利用者、あるいは共同セミナーの指導者として、一三名の方々が思い出を簡潔に語られ、明日のセミナー・ハウスの前途を祝福された(要旨は別掲)。祝電の披露に続いて、東京学芸大学学生有志五人によって、大学セミナー・ハウス讃歌がギターに伴奏で唱われた。

最後に挨拶に立った飯田館長は、十年をふり返り、もともと原來的なものもとても現実的なものであるということを確認しつつ歩んだ十年であったと述べ、多くの方々のご支援とご協力を感謝された(4頁参照)。終りにハプニングがあり、飯田館長の手卒業生の男女有志から花束が渡され、続いて専修大学教授・土方保氏の可愛いお嬢さんからも花束が贈られ

た。予期しなかった贈物を手に館長の表情もなごんだようであった。再び宮田清氏によるピアノ奏楽で、静かに力強く記念会の幕は閉じられた。

【主な来賓】(敬称略・順不同)

- 上代たの、山内恭彦、川喜田愛郎、小谷正雄、川田侃夫妻、内藤正夫妻、三宅彰、望月経治夫妻、横山絃一、笠木三郎、大東百合子、宮下啓三、飯島宗享、石井正博、伊能敬、石井千尋、今井義夫、井手久登、岩崎代志治、大野泰雄、押田勇雄、小田切松義、岡崎正、小倉芳彦、岡田真、笠松章、川瀬謙一郎、北野美枝子、岸本実、神原繁雄、正慶孝、高倉正治、田北敏行、千野熊男、椿弘二、寺川国秀、中村哲哉、成瀬治、仲勝司、中尾由矩子、根本松彦、平松幸一、土方保夫妻、細田友雄、松崎義徳、松崎三次、南義清、三村卓雄、三宅豊彦、本行孝司、安良岡康作、渡辺愈、早川豊水、宮田研二、池田篤、郡山正

■記念シンポジウム

— 明日の世界を考える —

式典の後に五分間の休憩をおき、ひきつづいてシンポジウムが講堂で開催された。

開会に当って飯田館長は、テーマにふさわしいお人柄であり学者であられる大塚久雄、板垣與一両先生によってシンポジウムが実現したことへの幸わせと、両先生の組

み合せによるシンポジウムは長い間当ハウスの念願であったことを述べ、進行を立教大学教授小林昇氏にバトンタッチされた。小林教授はお二人の先生の主著を通してご専門の領域を紹介され、それぞれのご発題に移った。

明日の世界を考えるために、今日の社会がどのような構造のものであって、どのように動きつつあるかを、まず最初に大塚先生が主として歴史家としての立場から、次に板垣先生が諸国家、諸民族の織りなす現在世界の問題から採り上げられた。

限られた時間ではあったが、司会者の巧みな進行によって会場からの質問が整理され、密度の高い質疑応答が行われた。

最後に、出席者を代表して当法人の評議員でもあられる上智大学教授・川田侃氏が大塚先生と板垣先生にお礼のことばを述べられた。特に会場の若い学生諸君に向けて、今日の大きなスケールのお話の背後には、非常に緻密な過去の一つの一つの歴史的な事実と現実的事象の研究が裏うちされているということ、スケールの大きさにのみ眩惑されることなく読みとってほしいと語られた。

■お祝いパーティ

学際サロンと銘打った、当日のお客様を中心とするお祝いパーティは、当ハウスの顧問山内恭彦博士の首頭による乾杯で開会され

た。大学院セミナー館にセットされた食卓を囲んで話の輪が広がり、学際サロンと呼ぶにふさわしい光景があちこちに現出した。

7時20分には開館十周年を祝って十本の火花が打ち上げられた。この火花は当ハウス開館以来の洗濯業者サンエスクリーナーの関口実氏のご寄付によるものである。けだし気のきいたお祝いとして大好評であった。大学院セミナー館からようこそ広場に足を運ばれた参会者の方々は、晩秋の夜空を高く仰ぎながら、美しく咲いた大輪の花を楽しまれ、別れを惜しんで多摩の丘をあとにされた。

■好評だったお茶席と

展示「十年の歩み」

式典に並行して、遠来荘ではやすらぎの茶席が設けられ、表千家の矢内宗紫先生とお弟子さんたちによるお点前の招待があった。当日来館されたお客様にお薄を召し上っていただきながら、多摩の晩秋を十分に味わっていただいた。なお、十周年のお祝いに、加藤六美前理事長より先生ご自身がお姫さきになった茶碗が遠来荘に寄贈された。ちなみに先生はこの茶碗の銘を「夜学」とつけられている。

また、図書館では「十年の歩み」と題する展示が行われ、入口には文字通り十年間風雨にたえて活躍した標識(入口の看板)が飾られた。会場いっぱい貼られた写真によって創立から現在に至るまで

の歴史が語られ、また資料としては設立発起人による歴史的な署名や、作詩者自筆の大学セミナー・ハウス讃歌、佐藤喜一郎氏の「真理」の書、来館者の署名を集めたサイン帳などをはじめ、当ハウスの出版物、刊行物、当ハウスが紹介されている雑誌、新聞記事の切抜き帳などが並べられた。

■学生交歓

レクリエーション・ナイト

当夜の在泊者(六グループ、一九〇名)が参加して十周年のお祝いの集いの最終幕を飾ったのが、このプログラムであった。ようこそ広場に紅の提燈がともされ、おでんとおにぎりや甘酒の屋台が並び、ビールも販売された。

セミナー室での演習を終えて集まった学生たちは予想外のごちそうに大喜び。たき火を囲む若い人の笑い声が一段と高くなる。どこからともなくセミナー・ハウス万歳の声がわきおこり、胴上げをされた飯田館長の体が宙に浮いた。多摩の丘はまさしく若人の丘であった。

旺盛な食欲を示した若者たちはこのあと講堂に移り、約一時間ほどフォーク・ダンス、即興劇、歌などを思う存分楽しんで、それぞれの宿舎にひきあげていった。

夜空はあくまで星が輝き、心配された晩秋の冷え込みもなく、まさに好天に恵まれた一日であった。

向って

人と行事＝



よろこび (上代, 飯田)



記念シン
ポジウム



夜空に打ち上げられた花火



学芸大生による讃歌合唱



正面右から飯垣, 大塚両教授, 左端は川田教授



花火を仰ぎ見る上代先生 (中央)



展 示 会 場



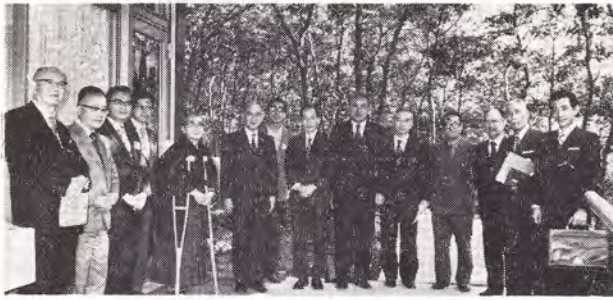
司会の
岡宏子教授

秋の多摩の丘にたくさんの方々
においでいただき感謝申し上げます。
もっとも原理的なものはもっとも
現実的なものである、セミナー・
ハウスはそれをやろうとしている
から、私は大いに興味をもって
応援しますよ、とおっしゃられた
のは南原繁先生であります。そし
て十年前の落成式のあとのパーテ
ィで、乾杯をしていただいたのも
南原先生でありました。今、その
先生はこの世におられず、この喜
びの日を共にすることはできません。
私はこうした激励に支えられ
て十年間を歩んでまいりました。
そしてご覧のとおり司会者も会
員校の先生、祝辞・メッセージを
していただく方も、音楽を演奏し
歌って下さる方もまた会員校の先
生であり、ここに今日集まってお
られる学生も、おそらく四〇校近
い会員校から来ておられるのであ
りましょう。大学の壁を越えて先生
も学生も共に集まって勉強する
という原理的なものが現実的なもの
となつて、この講堂の中に実現さ
れているというのであります。

◆あいさつ
館長 飯田宗一郎
はじめは一人、二人と協力者を
求めながら歩んでおりました。そ
してそれは極めて inter-personal
なものでありましたが、やがて大
学と大学の中に共同意識をつくり

inter-university になってまいり
ました。そして十年間の中で日本
が国際化するとも、大学セミ
ナー・ハウスもまた世界に眼を向
けなければならなくなつて、inter-
national な活動が加わつてま
いりました。
先ほどご紹介をしました十年勤
続職員、さらにまた三〇名近い職
員とともにこの丘を守り、日常の
業務を行つてまいりました。そし
てまた、たくさんの利用された皆
さんがここに記念樹を植えて下さ
りました。おそらく皆さんは、こ
の丘に久しぶりでおいで下さつ
て、このキャンパスの中を歩か
れ、これがご自分のゼミで、ある
いは共同セミナーで植えた樹であ
るということを確認しながら、樹
を植えることを確かめながら、樹
を感じて下さったのではないと思
います。多くの方がいろいろな立
場で協力して下さいました。先生
も、学生も、財界人も、文部省の
方も、それぞれの立場で参加して
下さったということが実を結んで
今日に至りました。これからシン
ポジウムをお聞きすることによつ
て、大学セミナー・ハウスは明日
に向つて何をなすべきかを学びと
つて、明日の活動の中に移して行
きたいと思つています。

思いおこせば、一大学が使うの
ではなく、みんなが使うというこ
とは大変よいことだからと言つ
て、三井銀行の佐藤喜一郎氏が募
金の片棒というより大元締をかつ



左から手塚、木村、公文、吉田、大塚、板垣、茅、小林、正田、安嶋、中嶋、ピタワ、飯田、筑波



記念論集を贈呈する三枝教授(左)

明日に =記念グラフ



学際サロン



乾杯をする山内恭彦博士(中央)



レクリエーション・ナイト

学際サロンの庭にカヤブキ民家はセミナー・ハウスにびつたりの新名所です。時々セミナーにも使われますが、外人接待の茶会とか大学の華道部の練習にまたとない茶室として使われます。現在、茶道具が

◆開館十周年お祝い募金のお願い—金額はお気に召すまま—

目標額 三〇〇万円

第一 多摩の民家遠来荘のために

……一八〇万円

第二 大学院セミナー館のために

……一五〇万円

揃っていないので、大変不便です。お客を招くにしても、茶道教室としても基本的な道具一式が必要です。欲をいえば庭に「つくばい」などもほしいです。

第三 講堂の映写機のために

……七〇万円

評でした。学会・研究会・院生コンパなどによく利用されますが、学者サロンとしては設備が不足です。気のきいた飲食接待用の食器道具類がほしいです。

学会の発表に、学生の交歓に、大学のオリエンテーションに、どうしても必要です。講堂の利用価値はこれで倍加します。



十年勤続者—右から酢屋、新江、荒川、高橋



卒業生から祝辞を受ける飯田館長

て出て下さいましたが、その方も残念なことに今は私どもとこの喜びを共にすることができません。実は私の心の中には一七年の歴史があります。当時の日本女子大学学長上代たの先生をお訪ねし、初めてこの構想を打ち明けたのが昭和34年1月でありました。inter-personal なはじまりは、まずそこから出発したと言ってよいわけ

【飯田館長宛の書簡から】

あの日はいろいろの感慨にふけりました。ほんとうにいい会でした。飯田様はじめハウスの皆様永年のご努力の有難さが身にしました。それだけに、食堂のマネージャー氏をはじめとする永年勤務の方々への表彰感謝のよおしが一番うれしく、心をこめて拍手したことでした。

唄 孝一

本日ご丁寧なお手紙に同封され

でありました。昨年、米寿をお祝いになられて、上代先生はお元気で今日ここにお見えです。先生にお立ちいただき、皆さんからお礼を捧げていただき、皆さんからのお感謝のしるしとして、上代先生どうぞお受け取り願います。

万感を言葉にかえて心からのご挨拶を終らせていただきます。

た記念会当日のスナップ写真三葉ご恵贈たまり、いつも乍らのご芳情有難く厚く御礼申し上げます。殊に大塚久雄先生と同じ机に両手をついて川田教授のことばに聴き入っている姿はわれ乍らほえましく、まことに千載一遇とはこのことと厚く御礼申し上げます。これからさきの十年間にさらに大きな飛躍と発展があることを期待し、否、確信いたしております。益々の御勇健を祈り上げます。

板垣 與一

祝 辞

▲来賓代表



安嶋 弥
(文化庁長官)

創立十年史『大学を開く』の中に、昭和37年に国立大学が協力校としての分担金を出すことが認められたというくだりがありすが、私は当時、文部省大臣官房会計課におりましたので、大学セミナー・ハウスとのかかわりは、これが最初でございます。

爾来、一四年がたっているわけですが、それほどお力になれたわけではありませんが、たえず気にかかってきた施設の一つでございます。



ヨゼフ・ピタウ
(上智大学学長)

おめでとうございます。また、心から感謝いたします。大学セミナー・ハウスによって各大学にも大きな刺激があらわれ、私たちも大学の中で人間関係

のことももう一度悟るようになりました。学生は何のために大学に来るかということ、セミナー・ハウスに参加した先生方、学生達も真剣に考えていたということ。主体性、人間関係、そして社会的責任、この三つの目的で大学に来る。セミナー・ハウスはこの目的を悟らせるために大きな役割を果たしたのです。

▲セミナーの指導者として



都留 春夫
(国際基督教大学教授)

昨日、学生が私のところに話しまいでまして、次のようなことを言いました。学生には二つの顔がある。大学に入って来たことによりそ行きの顔になって、悩みがないかの如く振舞う。誰かに自由に話したいと思つて、その相手に大学に探しに来るのだけれど、お互い何か話にくい雰囲気がある。しかも、それが学生と教師の間にもある。

これは、大学がなんとかしなければいけないことであり、努力はしていることですが、今の大学には限界があります。そういうものをセミナー・ハウスが今まで埋めてきてくれたというふうに思います。これからの大学は、セミナー・ハウスとともに、学生が爽やかなある大学生生活を続けていけるように努力していきたい、及ぼすながら私もお手伝いさせていただけ

ばと思います。

▲常連の利用者の一人として



神保 信一
(明治学院大学教授)

次の十年にも、今の表彰者の方が脱落しないで、またその二倍にも三倍にも増えてここで表彰を受けたいように期待をしたいと思ひます。

館長先生には、お金がなくてもいろいろなことができるということとを学びましたので、私も自分の大学で似たようなセミナーをいたしております。いつも施設が満杯になって、職員の方々にご迷惑をおかけしておりますが、これもセミナー・ハウスのお蔭だと思つております。私が利用者としてここで選び出されたのは、非常に利用率が高いということだろうと思ひますが、多いことは良いことだといふことは果たしてどうかわかりませんので、チヨコレートのように甘くならないようにしたいと思ひます。

▲共同セミナー委員長として

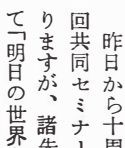


木村尚三郎
(東京大学助教授)

世の中は不況だと申しますが、大学共同セミナーはますます拡大、発展の一途をたどっており、飯田館長をはじめ第一回共同セミナーの運営委員長であられた永井

現文部大臣や諸先生のご努力の賜と存じております。

▲千人会員の一人として



筑波 常治
(評論家)

この十年の間に、私がここに来りました日数をあらためて数えてみましたが、たったの七日間だけであります。減多に出来ないのうちにこういふものがあつて、来る気にならばいつでも行けると考えることは、十年間まことに楽しく、心強いこととございました。一層のご発展をお祈りいたします。

▲教員懇談会から



川名 明
(東京農工大学教授)

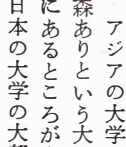
大学教員懇談会と申しますのは特定の集まりではなく、飯田館長その他の方々がご指導下さいまして世話人を決め、その時々々の大学の問題を、専門の、あるいは興味

を持つている先生方が集まって話し合っている会であります。

私も、大学紛争まではアドミネレーションに何か興味を持つのは学問の冒とくのような気がして、もっぱら勉強をしなくてはいけないというつもりでおりますのですけれども、学内でも問題が多くなり、悩みも多くなつてまいりましたときに、ちょうど格好の企画がありました。非常に格差の大きく、またいろいろな立場の方がおられる大学で、それぞれの考え方をつき合わせてみる、そして各大学の教授会にそれらを持ち帰るといふことが、お互いの大学の発展に非常に役立つことを私は発見いたしました。国際交流、入試問題等々、いろいろなことを検討してきております。

今後とも指導いただきまして、この会がますます発展していきうに祈つております。

▲国際学生セミナーから



中嶋 嶺雄
(東京外国語大学教授)

アジアの大学はどこでも丘あり森ありという大変すばらしい環境にあるところが多いわけですが、日本の大学の大部分はキャンパスに恵まれず、大学らしい雰囲気があります。しかも、そういうアジアから多くの留学生が来ております。そこで私は内心うしろめた

方々に大学セミナー・ハウスに行きなさい、ということをもつて言えることを大変誇りにしているわけでございます。今日もシンガポールからの留学生を一人連れてまいりました。

過去四年間にわたり国際学生セミナーが開かれ、東南アジアの留学生の方々を中心に、日本の学生と夜を徹して日本とアジアのかかわり合いを、時には激論し、時には涙を流さんばかりに論じ合いました。今日、アジアの激動の中でこの丘において語り合った諸君がそれぞれの部所である時のセミナー・ハウスでの体験を思いおこして、それぞれに明日の世界を考えていってくださるのではないかと、うらうらに思います。

▲海外の利用者として



E・ラングストン
(国際教育交換協議会 議事録代表)

日米間の学生の教育的な交流を始めるために、ちょうど十年前、私は協議会の代表として日本にまわりました。それから間もなくして落成式に招かれ、こちらにうかがったわけでありました。その後飯田さんに大変お世話になりました。たことを感謝申し上げます。

大学セミナー・ハウスは珍らしく面白い建築と、そして最もよいことは美しい環境を減ほさないで非常に落ちついた立派な雰囲気をつくっているということに、私は

感心いたしました。これからも立派な活動を続けられるようにお祈り申し上げます。

▲セミナーの卒業生として



長松 昭男
(東京工業大学 学助教授)

先ほど三枝先生がお触れになりました第3回大学共同セミナーに学生として参加したのが、私がセミナー・ハウスにお世話になった最初であります。その時はじめ三男坊であります。その時はじめて精神的な触れ合いの場を発見し、強烈な印象を受けたことを今でも覚えております。

このモットーであります「生活は簡素に、思想は高潔に」を覚えていただいでから十年たちましているのは生活は簡素にということだけで、非常に恥しい気がします。時々、おやじでございます飯田先生に「前の方も忘れるなよ」とお叱りを受けますが、学問研究の最先端に一兵卒として戦い合っているうちにかなり専門バカになってまいりましたので、そのうちにここへ来て、また洗脳してもらわなければと思っております。

息子としまして、この十年間、セミナー・ハウスを支えて来て下さった先輩、先生方、職員の方々に心から感謝したいと思えます。

◆すばらしい記念の企て、マスコミが十年の歴史を祝う◆

①日本経済新聞(50年10月31日) 大学セミナーの丘

—開かれた大学めざして十周年

記念会の前日に、日経の文化欄

に飯田館長が前記のような標題で簡単な十年の歴史を書いたことは、時宜を得た新聞の協力であった。創立の経緯から現在に至るまでの活動状況を、どちらかという裏話を公けにした読みものである。これを読まれた方が千人会に申込まれたり、記念式に出席されたのだから、日経文化部の企画と

しては、気のきいた祝意であった。

②文芸春秋 (50年12月号) 現代の松下村塾(座談会)

《司会者》東大助教授 木村尚三郎 《出席者》 文部大臣 永井 道雄 東大総長 林 健太郎 上智大教授 渡部 昇一 館長 飯田宗一郎

標題は「現代の松下村塾」となっているが、それは、大学セミナー・ハウスのことなだから、ジャーナリズムの感覚は新鮮である

る。しかも一方にはますます過熱する受験競争があり、行きづまりの教育の現状を打開するために「私塾」の自由な気風を見直そうとする風潮がある。そのときに登場したのが大学セミナー・ハウスの十年である。共同セミナー委員長の木村尚三郎先生が司会者をされたので座談会は極めて好調であった。永井文部大臣は人も知るセミナー・ハウスの支持者として、林東大総長は大学人として、この座談会の適役であった。

第31回理事会

10月15日(水)17時30分 銀行クラブ(千代田区丸の内)

【出席者】

△理事▽正田建次郎、中村哲、村井資長、中川富弥、勝木保次、福原満洲男の六氏(飯田館長は文芸春秋主催の座談会に出席のため欠席)外に委任状による出席一六氏

△監事▽太田善磨

【議事】

①国際交流オリエンテーション・センター建築に関する建築基準法「用途規制の例外」の申請について
計画の建築面積が限度面積を超えるため八王子市に用途規制の例

外規程の適用をうけなければならぬ旨の説明があつて、異議なく承認された。

②日本自転車振興会の補助金交付延期申請について

第一号議題の建物建設については当初の着工が大幅におくれたので、この施設のために決定している本年度分の補助金の交付方を一カ年延期されたい旨を申請すること承認された。

③募金委員会について

第一号議題に関わる施設の建設資金は募金によることとしているが、経済界の現況及び委員に予定している方々の諒承を得ていないこと等から未だ委員会の成立をみていない。

④協力会員校の申込について

つきに掲げる大学からの協力会

員校の申込みを全員異議なく承認した。

○神奈川大学(三学部)

○工学院大学(一学部)

○芝浦工業大学(一学部)

⑤短期大学を準会員校「仮称」として取扱う場合について
二、三の短期大学から協力会員校に準じた取扱いにつき検討されたいとの要請があるので、この制度について諮られたが、後日再検討することとした。

【報告】

つぎの各項について夫々の資料にもついで詳細に報告された。
①昭和50年度上半期の収支計算
②開館十周年記念論集の発刊
③開館十周年記念会の開催
④昭和50年度上半期における施設の利用状況